

# 総合学習（環境領域）

坂井文代 石川 誠  
大宮裕美子 丹後京子  
宮島浩典 古川雄次  
松下浩一 吉川昌博

## 1 領域の目標

全体論の総合学習でめざす子どもの姿「共に生きていく社会や環境に自らの活動を通して働きかけ、新たな自分、自信の持てる自分を創っていくこと」を受けて、環境領域として次の目標を設定した。

身近な環境にふれたり気づいたりしながら よりよい環境の  
保全や創造に主体的に働きかけようとする態度を育む

子どもの日々の生活をふりかえると、身のまわりの環境に対する意識の弱さを感じる 경우가多く、共生を意識した行動まではなかなか期待できない。そこでまず子どもたちが身のまわりに目を向け、環境を認知していくことが重要だと考える。それは、単なる知的理解という意味ではなく、自分の身のまわりを体験的に認識していく（ふれる、気づく、働きかける）ことである。そのような体験を通して、豊かな感受性が育まれるとともに、環境への気づきや生命に対するいとおしさが生まれ、自分と環境とのかかわりの中で共生を意識することができるのではないかと、またその結果、環境をよりよくしようという意識までも芽生えていく、そのような新しい自分を創っていくことにつながると考えた。

さらに、この目標に近づいていくために中・高学年ごとにねらいや内容に系統性をもたせることにした。

3年 … 環境との出会い ふれあい  
4年 … 環境への気づき  
5・6年… 環境への働きかけ

## 2 活動を構成するにあたって

### (1) 取り上げた視点について

環境領域では、昨年度の場合、「自然環境」を中心にした学習活動を構成してきた。本年度も昨年度に引き続き、「自然環境」を中心に学習活動を構成していくとともに、それに加えて、目標にある「よりよい環境の保全や創造に主体的に働きかけようとする態度」を育むために、「自然環境」を見つめていくときに大切にしたい視点を次のように考えて、学習活動を構成していくことにした。

1つ目の視点は「生命」である。これは、身近な環境に息づく昆虫や草花、木、鳥、魚、動物など、生きとし生けるものすべての生命をさす。生き物一つ一つを丹念に観察し、ふれあっていくことにより、どんな小さな生き物にもかけがえのない生命が宿っていること、その生命に対する愛しさやすばらしさに気づいていくことが豊かな感受性を育むことにつながるものであり、身のまわりの環境へ主体的に働きかけようとする態度を促すものとなるのである。

2つ目の視点は「有限性」である。これは、地球にある生命・資源あらゆるものは無限ではなく、有限であるということを示している。この「有限性」の気づきが、生き物一つ一つを大切にしていこう態度につながるとともに、環境保全の原動力になると考える。

3つ目の視点は「つながり」である。これは生きとし生けるものすべてがひとつの生態系としてつながって生きていることである。つまり、生命すべてがその取り巻く環境と相互依存関係にあり、ひとつの大きなつながりの中で生命を営んでいることを意味する。身近な環境を一つ一つの生命がつながった存在であることへの気づきが、すなわち環境を保全し、よりよいものへと創造していこうとする気持ちの育成に大きく寄与するものとする。

以上3つの視点にもとづき、各学年でそれぞれ単元ごとの活動を構成していくことにした。そしてこれらの3つの視点が学習を進めるにしたがい、子どもに自ずと身につけ、自然環境に働きかけていくことを期待している。

## (2) 学びを広げ深めるために

全体論では総合学習の単元を構想していくときに、①体験的活動を取り入れる ②学びの個性化を推進する ③学びの個性化に合わせて環境を整備することの3つを留意点としてあげている。そこで、環境領域では、それぞれを次のように考えて単元を構想するようにした。

### ① 「体験的活動を取り入れる」について

学校内では体験できない自然の中での活動こそ、自然認識、自然と自分との関わり（環境としての自然）の意識をこれまで以上に身をもって深めることができるであろう。直接自然にふれ、自然を実感する過程で、子どもは自分なりの問題を発見し、その解決に向かう追求活動を思考し、実行し、今後の活動展開を自分なりに見通すことも可能になってくる。そこで、活動そのものをねらいとした、自然を五感で感じられるような体験的活動（山などの探検、散策、川遊び、植物栽培など）を設定したい。そのような体験的活動を通して、一人一人の五感で感じたことを大切にしながら、視点にある「生命」の尊さや「つながり」、ならびに自然や生命の「有限性」を心の中で感ずることができるものとする。また、その活動は、時間の経過や季節の変化を意識できるような継続的な観察活動となるように「ゆとり」をもったものとする。また、人間と環境とのかかわりを感じられるように、調査ポイントや調査対象をいくつか選択できる「ゆとり」も大切にしていきたい。

### ② 「学びの個性化を推進する」について

「学びの個性化を推進する」とは、一人一人の追求課題や追求方法など問題の解決過程に個性化をはかっていくことを大切にすることだと考える。

そのために、まず学習内容やねらいに系統性を持たせることにした。なぜなら、学年ごとに内容のステップ化を図ることで、その学年なりのねらいがより具体化され、目標にいたるまでの子どものアプローチの姿を明らかにすることができるからである。また、学年の発達段階に応じた無理のない系統性を考慮した内容だからこそ、自分なりの追求課題や追求方法が生じやすくなるからである。ある子はひとつの動物の「生命」を追いかけるであろうし、ある子は生命間の「つながり」に着目するであろう。また、ある子は自然の「有限性」に目を向け追求していくことも考えられる。数年間という長期にわたって一つのことに関わり続ける中でこそ、3つの視点から「自然環境」を幅広くとらえることが可能となり、自己の学びの姿を見つめることも可能になってくると考える。

次に、個々が学習を進めていくときに、一面的な追求に終始することなく、自分の認識を広げたり深めたりできるようにするために、子どもが意見交換できる相互交流の場を単元の途中で設定することにした。

また、発展的な問題追求を可能にし、今後の自然に対する主体的な働きかけができるように自分なりの成果を発表する機会も設けることにした。なお、単元途中の相互交流の場面や成果の発表の場面では、子ども一人一人の願いやつまづきに対する不安をしっかりと見てとり、個が全体の場に生きるような適切な支援を行えるように留意したい。そして、自分と自然、自分と他人とを関連させながら、自分を振り返り、自己の変化の感得へとつなげていきたい。

### ③ 「学びの個性化に合わせて環境を整備する」について

環境領域では、学習環境の整備という意味で学習材にするものが重要になってくる。系統性を持たせることができ、環境問題にまで言及することが可能なぐらいの奥深いものでなければならぬし、十分な追求活動ができるだけの幅広いフィールドを持つものでかつ継続的な追求活動を可能にするためにも、学校の近辺にあるものでなければならない。そこで、それらの条件を満たすものとして野田山、犀川を核として昨年度より全学年を通しての学習材として位置付けている。

また、そこでの活動の中で、安全面の配慮や追求活動の個性化に対処すべく3つの視点に即応したアドバイスや支援が行えるように、専科とのT・Tや学年T・Tによる指導体制を構成したり、専門的な知識が豊富なゲスト・ティーチャーを招いたりして、学習材を十分に活用したい。さらに、問題追求や振り返りの場で、適当な実験や観察、多様な手法や表現ができるような施設・設備面での充実もはかりたい。